

日中両国における牌楼の変遷及び利用に関する研究

- 横浜、神戸、北京の牌楼を事例に -

The changes and uses of the Pailous in Japan and China:
A case study of the Pailous in Yokohama, Kobe and Beijing

郝 澤函
HAO Zehan

1. はじめに

(1) 研究背景

牌楼 (Pailou) または牌坊 (Paifang) とは、中国の伝統的建築様式の門の一つ、一列の立つ柱であり、空間を区別する建物である。現代の牌楼は石器時代の氏族の部落の出入り口にあった門の形をした建物から変遷してきた¹⁾。過去において、時代により、牌楼は教化の宣伝や権威の象徴など、様々な役を務めた。現在中国本土各地に残っている牌楼から、その牌楼の建造年代の歴史的な背景が見える。

中国の明清時代で、中国の封建体制の再建とともに、中国建築は固有の発展過程から、改善と新たな発展の時期を迎えた。その影響を受けて、牌楼の建設が盛んとなり、数量を激増し、また種類も多様になった。さらに、牌楼の外観が古代の簡潔な形から、複雑な形になった。表面に複雑な彫刻や壁画がとりつけられ、二本柱だけではなく、四本柱や五本柱などの牌楼が出現し、レンガや石など木材以外の材料を使った牌楼も多くなった。このように、研究対象となる牌楼は多数存在している。

この数年、牌楼は世界中の中華街の発展及び中国本土の都市の発展につれて、新たに建設され、街の出入口を示すとともに、「街のシンボル」という新しい役を務め、世界中の観光客を迎えている²⁾。本研究で対象とする横浜、神戸及び北京では、1980年代から2000年代までに様々な牌楼が新たに建設され、過去の時代の中国の牌楼と異なる外観や意義などの特徴をもっている。

(2) 研究目的

本研究は日本の横浜、神戸にある中華街及び中国の北京市内の近年リニューアルされた各商店街に建設された牌楼を研究対象とし、日中両国における牌楼の建設及びデザインについて、それぞれの特徴を比較し、相違点を明らかにすることを目的としている。日中両国の歴史において、それぞれの歴史的背

景のもとに、現在の姿になってきた。そのため、本研究は、横浜、神戸、北京に建設された牌楼の種類、意匠、用途の分類と、管理人へのインタビュー調査を行い、牌楼の建設目的、牌楼の意匠の変化などを考察する。そして、古代中国における牌楼について、町の様子を記録した様々な絵巻物から、描かれた牌楼の種類、意匠を整理し、現在の牌楼との相違点について考察する。

(3) 研究方法と論文構成

2章において文献調査から「牌楼」という建築物を紹介し、古代中国における歴史と変遷を説明する。また、研究対象とする横浜中華街、神戸南京町、北京各商店街における牌楼の歴史及び変遷について説明する。

3章では各研究対象での現地調査を紹介して、各牌楼の現状について、特徴、変遷や建設目的などを説明する。また、北京の牌楼の現状を把握するために、北京の歴史的商店街の琉璃廠、前門大街、煙袋斜街における牌楼の現状を説明する。

4章において、キーワードである「牌楼の利用」について、過去の絵巻物から、古代中国の牌楼の利用に関する状況を調査し、現在日中両国における牌楼の利用との相違点を事例として説明する。

最後の5章では論文全体の内容をまとめた上、結論を説明する。

2. 研究対象の概要

(1) 牌楼に関する概要

(i) 牌楼の歴史と形の変遷

おおよそ春秋時代(紀元前400年)に、牌楼の雛形が出現したといわれている。その時期の牌楼は二本の柱を立ちあげ、横に一本の梁を架けたものであり、衡門と呼ばれた。漢の時代では、「周礼」に基づき、条坊制の都市を作るため、城内に一つずつ小さい区間を区別した。その時期の牌楼はそれぞれ小

さい区間の出入口として、里坊あるいは闕と呼ばれた。魏晋南北朝の時代以降、古代中国の社会は厳格な門閥士族等級制度を形成した。その制度からの影響を受け、衡門の外形や機能などが次第に変わっていった。

隋唐時代になると、衡門の外形が変化し、烏頭門になった。「营造工法」によって、烏頭門の立柱は他の建物の一部であり、門には窓が付き、独立した建物ではなかった。宋の時代になり、町の里坊の制度は次第になくなると同時に、区画整理のための官邸は解体されたが、烏頭門坊だけが保存された。その時期の烏頭門が建物から独立し、威厳があり贅沢な意匠をもった建造物になり、闕門と呼ばれるようになった。

明清時代には牌楼の建設が興隆を迎え、その数量が激増し、建築方式によって、様々な種類が形成され、外形が複雑になった。最初は古代のように、簡潔な形であった。しかしながら、牌楼の建設が進むにつれて、柱の数、外形が変化し、多様な材料が使われるようになった。三本柱、四本柱、五本柱、八本柱の牌楼が出現するとともに、レンガ、石、更に漢白玉など木材以外の材料で建設される牌楼も多くなった。その時期の牌楼の表面には竜や鳳凰など伝説中の動物の彫刻や壁画がとりつけられ、屋根や柱の装飾も多くなった。また、地域性の建築意匠を反映し、北京国子監の瑠璃製牌坊や安徽省の徽州古牌坊など、様々な形の牌楼が生み出され、現在のような牌楼の意匠になってきたといわれている(図1)。



図1 明清時代の牌楼の様子
(筆者撮影)

(ii) 牌楼利用における種類

牌楼は利用する目的により、主に標識と記念物の二つの種類に分けられる。標識として建設された牌楼は、街巷道路牌坊、壇廟寺觀牌坊、陵墓祠堂牌坊、橋梁津渡牌坊及び風景園林牌坊の5つの種類がある。

一方、記念物として建設された牌楼は、大学士坊、士科坊及び貞孝節烈牌坊の3つの種類がある(表1)。

表1 牌楼の種類、機能及び意義

牌楼の種類	牌楼の機能・意義		
標識により	街巷道路牌坊	街あるいは道路の標識	
	壇廟寺觀牌坊	宗教建築群の一部	
	陵墓祠堂牌坊	王侯貴族の陵墓建築の一部	
	橋梁津渡牌坊	橋と組み合わせた	
	風景園林牌坊	美景絶景の飾り	
記念により	大学士坊	政府の役人たちの成績を表彰する	
	士科坊	過去時代の学生たちの科挙達成を表彰する	
	貞孝節烈牌坊	貞節牌坊	女性の貞節な品行を表彰する
		孝節牌坊	親に孝行をする人を表彰する
		忠臣牌坊	忠義を尽くす高官を表彰する
		義舉牌坊	多数の善行を行った人を表彰する
長寿牌坊	長寿の人に対する尊敬を表す		

(2) 日本の中華街における牌楼の概要

日本における中華街は、横浜、神戸及び長崎の三つの都市にあり、そこに建設されたそれぞれの牌楼は、各中華街の特徴を表わしている(表2)。

表2 日本の各中華街における牌楼の情報

場所	建設年	牌楼名	きっかけ、目的
横浜中華街	1955年	善隣門	戦後復興の一策として
	1994年~2004年	延平門 など	バブル経済が崩壊によって、来街者が激減し、客寄せとして
神戸南京町	1982年	南楼門	横浜中華街からの影響を受け
	1985年	長安門	景観向上、日中友好の象徴
	2005年	西安門	阪神大震災からの復興のモニュメント
長崎新地中華街	1986年	東門など	横浜・神戸と並ぶ中華街に発展するよう願いを込め

(3) 北京の各商店街における牌樓の概要

北京の各商店街における牌樓に関する情報は、下の表3に示す。

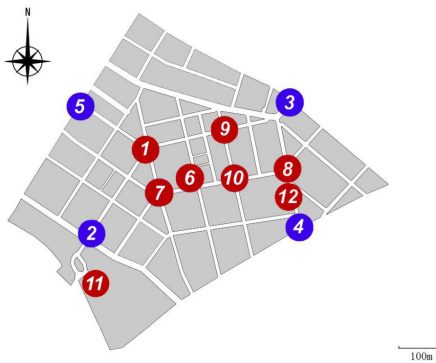
表3 北京の各商店街における牌樓の情報

場所	建設年	基数	昔の状況	きっかけ
王府井	2009年	6	ない	「老北京風情街」の建設につれて(観光資源として)
前門大街	2008年	1	あり	街のリニューアルにつれて(観光資源として)
煙袋斜街	2005年	1	ない	同上
琉璃廠	-	-	ない	-

3. 横浜、神戸と北京における牌樓の現状

(1) 横浜中華街の牌樓の現状

現地に12基の牌樓が建設されており、それぞれの牌樓は、外観に特徴をもっている。その中で、東西南北の方角にある4基の牌樓は、四神相応の考えに基づき設計され、重要な意味を持つ牌樓を考えられる。(図2)



番号	牌樓名	建設年	種類&用途
1	善隣門(二代目)	1989年	日中友好のモニュメント
2	延平門	1994年	四神相応
3	朝陽門	2004年	
4	朱雀門	1995年	
5	玄武門	1995年	
6	関帝廟坊	1990年	宗教建築のゲート
7	地久門	1995年	ベア、関帝廟通りの東門と西門として
8	天長門	1995年	
9	市場通り門(北)	1995年	ベア、市場通りの北門と南門として
10	市場通り門(南)	1995年	
11	西陽門	2001年	観光資源(ゲート)
12	天后宮坊	2006年	宗教建築のゲート

図2 横浜中華街の牌樓の分布

これらの4基の牌樓には、方位の四神(青龍神、朱雀神、白虎神、玄武神)を象徴する特別な飾りが付き、厄災の侵入を防ぎ、街を加護し、街内の人々に「吉祥」及び「幸福」をもたらす深い意味を持つ。

(i) 延平門

1994年に、中華街の西門が延平門にリニューアルされ、西方の守護神の白虎を象徴する白色に塗装された。四つの柱の頂部に、白虎の彫像が設置されている。四神相応によれば西に位置する門の名を「白虎門」とする。しかしながら、台湾の華僑から、「白虎は性的な隠語」という反対意見が出たため、中国の歴史にある「延平(平和と平安が永遠に続く意味)門」(唐の時代の長安城の西南部の城門)とされた。

(ii) 朱雀門

1995年に南門の朱雀門がリニューアルされた。朱雀は南方を守護する伝説の獣であり、五行の火を象徴するため、牌樓の柱及び瓦の色を赤色と黄色に塗装された。梁と柱の間の角度を維持して、梁を支える雀替の部分は、朱雀のように彫刻された。また、屋根の形状が弧状にデザインされ、朱雀が蒼穹で巨大な翼を振るようなイメージを表している。

(iii) 玄武門

1995年に北門が玄武門にリニューアルされた。北に置かれる門の色は、黒とされる。しかし、「黒い門など見栄えがしない」と反対の声があったが、当時の中華街発展会協同組合の理事長林氏による説得を経て、現在の玄武門が建設された。玄武門の外形は延平門に似ており、4つの柱があり、柱の頂部に玄武の彫像を設置しながら、梁に玄武の壁画を描いている。

(iv) 朝陽門

最初の延平門がリニューアルされた約10年後の2004年2月に新たな姿で東門が「朝陽門」として再建された。再登場の朝陽門は高さ13.5メートル、幅12メートルで、横浜中華街において最大の牌樓になり、全体的に青龍を象徴する青色に塗装された。他の四神相応の牌樓と同じように、朝陽門の梁には青龍の壁画が描かれ、吉兆を象徴する彩雲も描かれている。西門の白虎門の名がなくなったため、東門が東方位及び青龍が象徴する「朝」を表して、「朝陽門」となった。

(2) 神戸南京町の牌樓の現状

現地に三つの牌樓が建設され、全ては街巷道路牌坊として南京町の標識及びゲート(東側、南側、西側、図3)となった。横浜中華街のような四神相応

の牌楼ではないため、全体的に黒色や青色には塗装されていない。また、近年に周りの住民からの要望のため、南京町の北側（中国獅子が設置されている場所）に新しい牌楼を建てる計画がある。その新しい牌楼のデザインは、横浜中華街の四神相応の牌楼を参考する可能性があるという³⁾。



図3 神戸南京町の牌楼の分布

(i) 海栄門（南楼門）

1982年6月27日、南楼門は台湾で作られ、神戸南京町の最初の牌楼として建設された。2006年4月、南楼門のライトアップが完成し、名称も海栄門に替えられた。南京町の外側の銘板に新しい名称を載せ、反対側の銘板に「飛翔」が載せられた。長安門と西安門に比べて、海栄門の外形は全体的にシンプルであり、中国明清時代の牌楼に似ている。梁に壁画があるが、横浜中華街の四神相応の牌楼のような四神に関する壁画ではなく、中華文化の象徴の龍と鳳凰が描かれている。また、海栄門の柱及び瓦は中国の明清時代の宮殿に塗られた赤色と黄色に塗装されたため、海栄門は三つの牌楼の中で最上高い地位と思われる。

(ii) 長安門

中国は漢白玉の輸出を初めて許可し、その材料を使って長安門が1985年11月19日に落成された。1995年に阪神大震災が発生し、長安門は一時的に損壊し、その翌年の1996年10月1日に再建された。二代目の長安門は、斗拱を持たず、屋根下の梁の部分は初代のパーツを転用している。海栄門と異なり、長安門の銘板には牌楼の名称が載せられていない。その代わりに、南京町の外側に「敦睦」（親密及び和睦の意味）という名称が載せられたとともに、反対側の銘板には「友愛」が載せられた。東門としての長安門の表面に多数の龍が彫刻された一方、その様式は中国の伝統的飾りを模すと判断され、四神の青龍に関連している牌楼ではないと考えられる。

(iii) 西安門

2005年1月15日、阪神大震災の復興のシンボルとして、南京町の西に西安門が落成された。海栄門と同じように、西安門の名称が南京町の外側に向き銘板に載せられたが、反対側に「光復」が載せられた。他の二つの牌楼と異なり、西安門の柱の基部は石造である。その表面に彫刻された模様が龍などではなく、代わりに中国で花王⁴⁾と呼ばれる花の牡丹が彫刻されている。北宋の儒学者周敦頤が「愛蓮説」に「自李唐以来、世人盛愛牡丹」（唐の時代以来、世の中の人々が牡丹を熱愛している）と書いていることから、中国の人々が牡丹を大切にすることがわかる。また、白虎に関する飾りもないため、西安門は四神の白虎に関連している牌楼ではないと判断される。

(3) 北京における牌楼の現状

(i) 王府井

現在現地に六つの牌楼が立ち、神戸南京町と同じように、全ての牌楼は2009年に老北京風情街の建設につれて、街の標識及びゲートとして建設されたため、四神相応に関連している牌楼は建設されていない。また、日本の牌楼と異なり、王府井の牌楼には名称がない、その代わりに銘板のところに街の名称を書いている。

(ii) 前門大街

新築の正陽橋坊を昔の絵巻ものや写真と比較すると、大きな相違点はない、表面の壁画及び屋根の上の飾りは四神相応に関するものではない。また、大通りの両側の商店街には、出入口の所及び街の中心部に牌楼が建設されない、代わりに別の建物をシンボルとして建設された。それぞれのシンボルは、外観から見ると、四神相応に関するものではない。

(iii) 琉璃廠

琉璃廠の主要街路に建設された牌楼はないが、その代わりに街の出入口に伝統的建築意匠を含む横断歩道橋が建設されている。また、店の看板として建設された牌楼がありながら、柱がない、屋根及び梁の部分が牌楼に似ている建物がある。外観から見ると、琉璃廠には四神相応に関連している建物がない。

(iv) 煙袋斜街

2005年、街の東口に伝統的様式の牌楼が建設された。王府井の牌楼と同じように、煙袋斜街の牌楼には名称がない、銘板に街の名の「煙袋斜街」が書かれている。牌楼の表面には伝統的な模様が描かれている。柱の頂部に彫像がないため、四神相応に関連

していない牌楼と判断される。

4. 過去及び現在における牌楼の利用

(1) 古代中国の牌楼の利用について事例の考察

文献から古代中国における牌楼の利用について、具体的な事例に関する詳しい情報が取得できないため、過去の町の様子を記録した絵巻物を調査した。調査対象として利用した絵巻物は以下の基準によって、選択した。

(i) 絵の種類を選択

標識及び記念物としての牌楼は、都市に建設されたことが多いと考えられるため、都市若しくは村の様子が描かれた絵巻物を調査対象とした。

(ii) 時代の選択

牌楼は宋の時代から独立の建物となったため、宋の時代以降に描かれた絵巻物を調査対象とした。

調査によって、数々の画面の内容を整理し、牌楼の利用に関するデータを図4に示す。

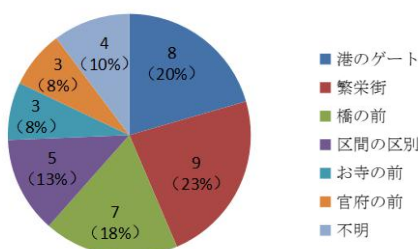


図4 絵巻物における牌楼の利用状況

調査の結果について、描かれた全ての牌楼で、川、湖の辺りに建設された牌楼（港のゲート、橋の前）は、調査対象全体の38%である。ゲートとして建設された牌楼（区間を区別、お寺の前と官府の前）は、調査対象全体の29%である。また、絵巻物から判断できない牌楼（記念物、その他）は、調査対象全体の33%である。この結果より、古代中国における牌楼は、日本横浜中華街の四神相応のような牌楼がなかったことが分かる。

(2) 現在中国における牌楼の利用

現在の中国の新築牌楼は、主に標識として建設された街巷道路牌坊であり、日本及び海外の中華街にある牌楼と同じである。古代中国のものより、高さ及び幅を調整し、現代都市の交通手段に合わせてコンクリートで建設された。

また、時代が変わり、封建思想を教化することがなくなるにつれて、牌楼を建設する場所の制限がなくなり、建設の場所が自由になった。そのため、多数の新築牌楼は、商店街の目立つ場所や町の出入口

の所など標識の役割として、単純な飾り建築物となった。

(3) 現在日本における牌楼の利用

(i) 四神相応に関する利用

現在日本の四神相応では、山川道澤を指す⁵⁾。中国元代に編集された家政全書である『居家必要事類』の『周書秘奥营造宅経』にある宅地の選地条件の記録「屋宅舎。欲左有流水。謂之青龍。右有長道。謂之白虎。前有滄池。謂之朱雀。後有丘陵。謂之玄武。為最貴地。」（屋宅は舎である。左（東方面）に流水有るを欲す。これを青龍と謂う。右（西方面）に長道が有る。これを白虎と謂う。前（南方面）に池が有る。これを朱雀と謂う。後ろ（北方面）に丘陵が有る。これを玄武と謂う。最も貴地と為す。）に近い。これに基づいて、横浜中華街にある四神相応の牌楼は、日中両国における四神関係の思想からの影響を受けて、誕生したものだと考えられる。

(ii) ゲートに関する利用

昔の中国において、ゲートという概念は、牌楼でなく、門を指すことである。それぞれの門の名は、時代及び場所により、様々な名称がある。隋唐時代の長安城では、四神の名を使い、方位相応の門を呼ぶことがあった。この先例から見ると、現在日本における牌楼は、過去の中国の門の機能を備えるように利用された。

(4) 現在と過去の牌楼に関することの相違

(i) 建設地の相違

過去の標識及びゲートとして建設された牌楼は、主に繁栄街の中に立ち、現在の日中両国における新築牌楼のような街全体の範囲を包み、ゲートとして建設された事例はが少なかった。

また、過去のような、川及び湖の辺りに建設された牌楼は、現在の横浜、神戸と北京に建設されていない。

(ii) 建設のプロセスの相違

清の時代の『大清会典』に牌楼を建設する前の詳しい手続きが記録されている。本文では貞節牌坊の建て方を事例として説明する。貞節牌坊を造るには、朝廷に許可された後、地方政府が国の資金を支出し、女性の夫の宗族と相談した上、牌坊を建設する。また、過去の政府が提唱する思想の教化を人々に示すため、多数の牌坊が国費で建設された。

しかし、神戸南京町における牌楼の建設は、寄付で行われた。法務省に牌楼の建設に関する申請書類を提出、中国の建築会社との連絡や建設工事の準備

の奔走など、全てが寄付者が担当した。

北京における牌樓の建設は、主に伝統的商店街の開発の一環として建設され、商店街と同じようなデザインとして統一されておき、横浜、神戸のような単独建設の牌樓と異なる。

5. 結論

1章では、牌樓の定義と簡略史、近年の発展について既往研究の状況を紹介し、本研究の位置づけを行なった。そして研究目的、研究方法及び論文の構成について説明した。

2章では、牌樓の歴史について述べ、紀元前400年の古代中国の春秋時代の衡門から、歴史の変遷によって、名称、外形や意義などの変化を述べた。そして、建設が大きく進んだ明清の時代において、牌樓の建築意匠は地域性を反映し、多数の種類が形成された。そして様々な経緯を経ながら、現在のようない匠になってきたことを説明した。

3章では、研究対象とする横浜、神戸及び北京への現地調査の内容を述べた。調査から、この三つの街の牌樓は主に「日中友好」、「観光」及び「中華文化の宣伝」を目的として建設されたことが分かり、そのうち横浜中華街の四神相応の牌樓が特別な種類であり、神戸と北京で見られない。また、北京の牌樓は全てが明清時代の意匠を模して建設され、日本で見られない店の看板となる牌樓がある。

4章では、絵巻物から過去の牌樓の建設と利用に関することを整理し、昔のような川及び湖の辺りに建設された牌樓は、現在の横浜、神戸と北京に建設されていないことを解明した。さらに牌樓の材料(近年に建設された牌樓は、屋根以外はコンクリート製であり、古代中国のような木造や石造などと異なる)、建設地(現在日中両国における新築の牌樓は街の出入口に建設された事例が多数であり、昔は街全体の範囲を包みゲートとして建設された事例は少なかった)などの相違点があった。さらに、横浜中華街の牌樓の一部は、四神相応に関連し、またいくつかの牌樓には昔の門の機能が与えられた。そこから、中華文化は中国本土以外の世界各地に様々な形として建設される現象が見られるか、また外国の歴史や文化を反映させて建設されることが明らかになった。続いて、牌樓の建設について、昔の中国では、中央政府に許可されて地方政府から資金を出すことが不可欠であったが、現在の日本の中華街において、許可の提出、資金の提供及び建築会社との連絡は、主

に寄付者によって行われ、個人若しくは団体の工事となることが解明した。

注

- 1) 参考文献1のp.227、「牌坊一般について」に記録されている。
- 2) 参考文献3のp.14に記録されている。
- 3) 神戸南京町商店街振興組合の理事長曹英生氏から取得した情報
- 4) 明の時代の名医、李時珍が「本草綱目・卷十四草之三」の中に、「群花品中、以牡丹第一、芍薬第二、故世謂牡丹為花王、芍薬為花相」という評価があった。
- 5) 平安時代に書かれた「作庭記」に記録されている。

参考文献

- 1) 魏則能：「貞節牌坊—安徽省徽州の貞節牌坊を中心に—」、多元文化(第8巻)、pp227-241、2008
- 2) 楼慶西：「中国小品建築十講」(第二版)、生活読書新知三聯書店、2014
- 3) 山下清水：「新・中華街」、講談社選書メチエ、2016
- 4) 菅原一孝：「横浜中華街発展の歩み」、日本食生活学会誌(第18巻第2号)、pp172-176、2007
- 5) 青木茂・小林宏光：「中国の洋風画展—明末から清時代の絵画—版画・挿画本」、町田市立国際版画美術館、1995
- 6) 「清代宮廷繪畫」、故宮博物院藏文物珍品全集、商務印書館(香港)、1996
- 7) 梁思成：「中国建筑史」(第二版)、百花文芸、2005
- 8) 王彬・徐秀珊、「北京地名典」、中国文聯出版社、2008